浅井三姉妹ゆかりの地、河芸

伊勢上野城跡

伊勢上野城は、標高30メートルの高台にあって、城域は東西約250メートル、南北約550メートルにもおよび、当時としては中勢地域の中では最も大きな平山城の一つであったと考えられています。城の主郭の周囲には、かつて土塁（どるい）や堀切りで区画された郭が取り巻き、特に主郭の東側には幅が20メートル近い空堀があり、その四周には今も所々に土塁が残り、城らしさをとどめています。

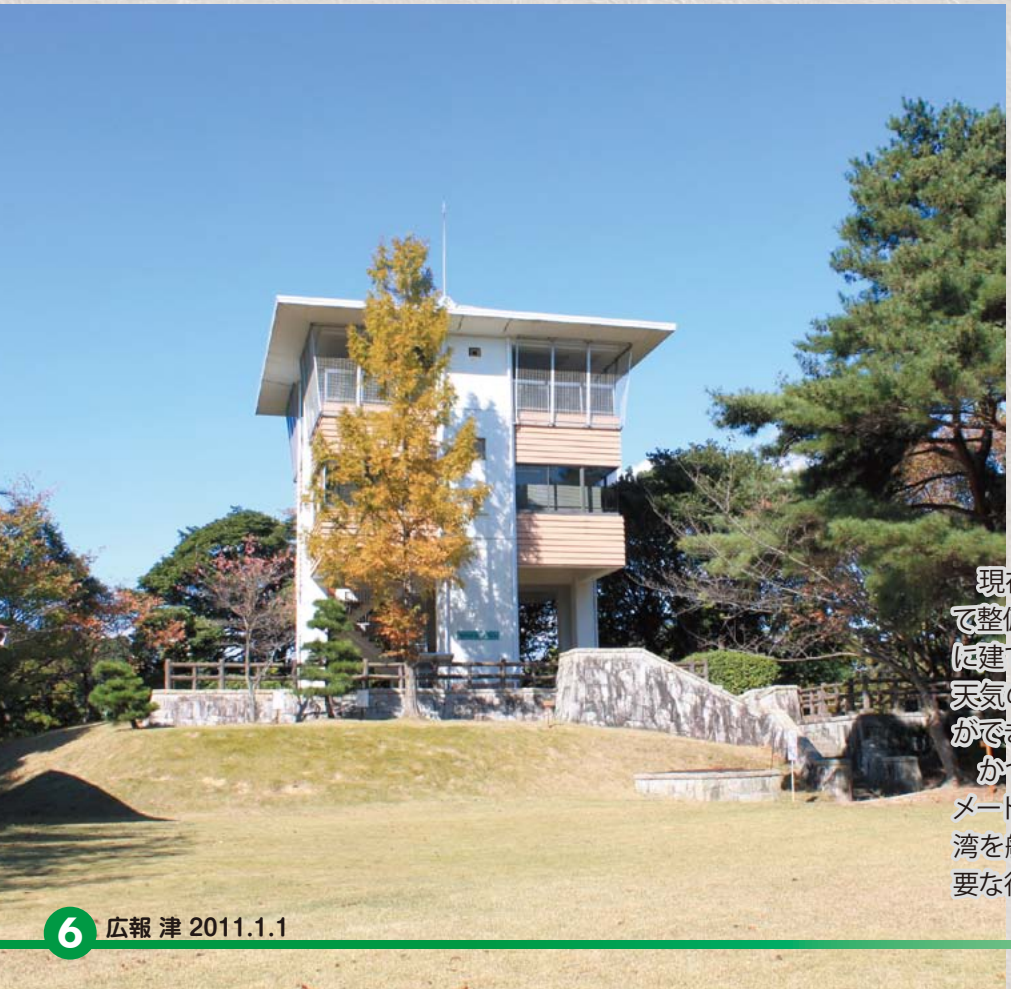
戦国時代の伊勢国の勢力図は、北勢は北勢諸士と関氏、中勢は長野氏、南勢は北畠氏が治め、互いにけん制した関係にありました。そのような中で、長野氏の家臣で安濃郡分部を本拠地としていた分部光嘉は、長野氏から奄芸郡を中心とした海岸地域を抑える役割を与えられ、この城を預けられていました。

1568（永禄11）年には、織田信長の伊勢侵攻により、弟の信包がこの城に入り、分部氏は信包に仕えました。信包が1580（天正8）年に安濃津城（津城の前身）に移ると、分部氏が再び伊勢上野城の城代となりました。

関ヶ原の戦いの後、分部光嘉は二万石の上野藩主となりますが、二代藩主の分部光信が近江国大溝（現在の滋賀県高島市）へ転封になると、この地は紀州藩領となり、伊勢上野城も廃城となりました。

おすすめビュー

二の丸跡から少し下ると、伊勢湾を一望できる場所に東屋があり、大パノラマが広がります。浅井三姉妹もこの景色を楽しんでいたのではないのでしょうか。



現在、上野城跡一帯は本城山青少年公園として整備され、憩いの場となっています。天守台跡に建てられた展望台からは、錫杖ヶ岳や経ケ峰、天気のいい日には、中部国際空港も見渡すことができます。

かつて本丸跡には、幹周り７メートル、高さ27メートルの「本城松」と呼ばれる大樹があり、伊勢湾を航行する船や漁船にとっての目印として重要な役割を果たしていました。